

## 米? 「画史」について(続)

著者	山岡 泰造
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	35
ページ	69-91
発行年	2002-03-31
その他のタイトル	Mi Fei's Hua Shi : Its Translation and Commentary
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16204">http://hdl.handle.net/10112/16204</a>

## 米芾「画史」について（続）

### 山岡泰造

章友直（伯益）は亀や蛇を巧く画く。篆字の筆法を用いて画くやり方は大変面白い。また篆字の筆法で棋盤を画くと、一筆一筆よく似ている。その女もこのやり方が巧みである。杭州の僧真慧は山水・佛像を画いたが、近年の作品は翎毛だけである。その墨竹には江南の気象がある。大牛を画くと、その大きさは数尺もあり、形状は虎に似ている。

艾宣・張涇・宝覺大師の翎毛と芦雁は凡つぽくない。宝覺大師が一鶴を画いたとき、王安上（純甫）はこれを見て薛稷の作だとして持つて行ってしまった。

印湘は画を見るとそれをすぐ模写する。そして眞を乱さないものはないのである。

杭州の士人林生は江湖の景色を画き、その芦雁水禽の気韻格調は清雅の極みである。南唐にはこの種の画はなく、徐熙に匹敵しうるもので、艾宣・張涇・宝覺よりも上である。彼の作品を入手する人は滅多にない。

現代の人物を画く場合、目のきかぬ人は有名な（上位にある）古人画家の名前をそれにつけ、類似のものには正しい画家の名前をつける。（大抵画今時人、眼生者即以古人向上名差配之、似者即以正名差配之）好事家と賞鑑家は二つの異なる種類のものである。賞鑑家とは、絵画を篤く愛好し、記録を広く閲覧し、また自分でも納得し、あるいは自分で画を画くこともできる。それ故その収集品もみな精良なものであるような人をいう。近世の人で財力があり、もともとはそれほど画が好きではないが、風雅を身につけたいと思つて、他人の耳目を借りて画を購入する人、このような人を好事者という。好事者は収蔵している凡庸な作品を玉軸で飾つたり錦囊で包んで珍しい宝物として秘蔵するが、ひとたび開陳すると物笑いの種になりそうなものである。私はいつも机をたたいて大声で叫んでいる。「羞づかしくて死んでしまふ」（慙惶殺人）と。王誥はいつも私がこのように言うのを見ていて、いつもそれを後輩の曹貫道に話していった。曹貫道もこのことを話して、人を笑わせるような画を見るたび

に「米元章は『羞づかしくて死んでしまふ』という。」と語った。そして手紙の中で画のことを話題にするとき、いつもこのことを利用した。近世の人達が收藏する画はたいいて私の語を贈られるべきものである。

私は老いたが、いつも新しい画を観賞したい。賞鑑家たちと物物交換した書画は非常に多く、一一記載はしていない。しかし画面の上方にたいいて私の印記があるので見分けることができ傑作でないものはない。どうせ万金に値する傑作は、有識者に激賞されても、好事家の氣に入ることにはならない。(萬金之玩、自付識者擊節、不爲好事道)

⑧⑦ 鍾離の景伯(公序)家 燕穆の画は「礼部侍郎燕穆之画付女五娘」と落款があり、氣格はその地位にふさわしいものであった。

⑧⑧ 王琪(君玉) 王維「堯民鼓腹図」を收藏。

⑧⑨ 劉涇(巨濟) 唐人「脱壳殼筍図」を收藏。生けるが如き画である。

⑧⑩ 錢藻(醇老)家、張瓌「松一株図」。下に水の流れる谷があり、松の上に八分の書で詩が一首記されている。詩中の句に「近溪幽湿処、全藉墨烟濃」とある。また張瓌の答詩もあり、それは大夫孫載家にある。

古書画の筆法はみな円である。これは硯に助力を仰いでいるからである(古書画皆圓、蓋有助手器)。晋人、唐人はみな鳳池硯を用い、中心は瓦の凹みと同じで、それ故硯瓦とも呼ばれ、一片の花頭

瓦を三脚の上に安置したようにみえる。墨は螺と呼ばれ、必ず蛤の粉のように製造されている。これまた明かに凹硯を用いるのである。一度筆をとつて凹形の硯にのせると、筆の先はすでに円となる。従つて書画の筆法もみな円とならざるを得ないのである。本朝(宋朝)の硯になつてはじめて中心が砥石のように平になつた。一度筆をとれば筆の先は扁平となり、その字もまた扁平となる。唐詢(彦猷)ははじめて鑿心凸硯を作り、「よろしく墨色を見るべきで、筆を援るといつも筆先は三角となる。どうして円にできようか。」と言つた。私は少々その様式を追究して、その硯を復原し、士人の間でこれを使用する者もいた。ただし鍋形の背面を少し平にしたが、それも瓦の背面に達しない程度である。一二の氣心の知れた友人で理解力のある人達がこれを使用したか、やはり世俗の人達にこれを説明して理解してもらうのは不可能である。

坦坦として明白で識別し易いものは、顧愷之・陸探微・吳道子・周昉の人物画と、滕昌祐・辺鸞・徐熙・唐希雅・祝某の花竹翎毛画と、荆浩・李成・関同・董源・范寛・巨然・劉道士の山水画である。戴達の牛図や、曹霸と韓幹の馬図、韋鑿の馬図は辨分し難いものである。それは似たものが多いからである。近頃の人達(今人)の画は、また深く論じるほどの価値はなく、趙昌・王友・鍾鬻らの画はそれでもつて墻壁を遮覆することはできるが、それらが無くとも物足らないという感じはしない。程坦・崔白・侯封・馬賁・張自芳といった連中の画は、みな茶店や居酒屋の墻壁を画くもので、周越(仲

翼)の草書と一緒に掛ければよく、私達の議論に入つて来るものではない。無名の古画を並べておいても、なお古き友人とするに足るものであろう。

⑨端州の陳の高祖(陳霸先)の子孫が收藏する南朝陳代の「諸佛図」や「帝眞図」の白画(白描画)。唐代、御史の章某に命じて題記を書かせた。絹帯で束髪し冠を戴らぬ陳後主が酔つて舞つてゐる様子を画いている。

⑩蘇泌家 巨然「山水図」。平淡で奇絶である。

⑪蘇洵(及之)家 徐熙「四花図」。蘇家伝来の画である。

⑫蘇汶(達復)家「江南隄禽図」。

⑬同家 徐熙「酸榴図」。

⑭米芾家「甜榴図」。丁晋公(丁謂)の家にあつたもの。

⑮滕中孚(元直)家 徐熙「对花果子図」四幅。

⑯石楊休家 唐画「韋侯故事図」横幅六幅。もと私の收藏品で、山水・人物・車馬がそれぞれ完備しており、後世の人が張萱の作と題している。これは私が李邕の書帖を入手するために徐熙の「牡丹・海棠図」双幅とともに交換したものである。

⑰米芾家 古代書帖 私の家には古画の收藏が最も多いが、私は古代の書帖が好きで、いつも一幅から十幅の古画と書帖一帖とを交換していた。古代の書帖一帖は、金銭財物で支拂う場合でも、犀角や玉器や瑠璃や宝玩と交換する場合でも、おおよそ名画十軸の値段に相当した。画面上の四隅にはすべて私の家の印記が捺されており、

一見してはつきりわかるものである。

私の家には晋・唐の古帖が千軸もあつたが、今では散佚して百軸ほどしか残っていない。現在、極上のもはわずかに十軸だけである。すぐれた書帖もあつたが、交換のために次々と私の手もとから去つて行つた。晋画は何としてでも保存すべきであり、私にゆかりのある画で晋代の作品に数えられるものに困んで、私の住居に「宝齋」と名づけた。私はここへ来るたびにそれらを掛けて楽しんでゐるが、これらの画は現在、世間では二度と手に入れることはできない。書画は価格を論ずることは出来ないし、士人とは金銭でつき合うことは難しい。だから書画を物々交換するのが自然に上品なやり方になるのである。近頃ある一つのを收藏するのを命がけのようにいうのは実に笑うべきことである。人生においてたまたま目にとまつたものは、永く見ていると嫌気がさすものである。時々新しい愛玩物と交換すれば、自分と相手と双方の欲望を満たすことができる。これがすなわち達人である。

私の家の書画の收藏品のうち最上品には、私の姓名と字を刻んだ印を用いる。「審定真迹字印」、「神品字印」、「平生眞賞印」、「米芾秘篋印」、「宝晋書印」、「米姓翰墨印」、「鑒定法書之印」、「米姓秘玩之印」がそれである。玉印は六枚、すなわち「辛卯米芾」、「米芾之印」、「米芾氏印」、「米芾印」、「米芾元章印」、「米芾氏」の白文印で、これらの印のある作品はすべて絶品である。玉印は書帖にのみ用いる。その他「米姓清玩之印」を用いている作品はすべて次品であり、下品は

ない。その他の字印は百枚あるが、上品の印と混じえて用いることは難しい。私が自分で画いた古代の賢人の画像には玉印のみを用いる。

⑩馮永功（世勳）家 「日本着色山水図」。南唐人は李思訓の作品だといっている。

⑪蘇舜欽（浩然）家 「明皇幸蜀道図」。寿州（安徽省）人が摹した作品。人物が非常に小さく、李思訓の作品といっているが、宗室趙仲忽家の李思訓とは異なる。

黄筌の画は収集する価値がない。臨摹し易いからである。徐熙の画は摹写することが出来ない。

⑫蘇舜欽（子美）家 黄筌「鶴鵠図」。この画は蘇州だけで三十本の摹本があり、すべて全く同じである。近頃の画院の画家の画く屏風は、すべて黄筌の格式を用いていて、一寸古くなったものが流出すると、黄筌の眞迹と全く識別できない。

⑬王詵（晋卿）家 黄筌「風牡丹図」六幅。私はこの作品を交換によって入手した。

⑭于才翁（黎明）の子鴻（遠復）家 戴嵩「白牛図」小幅。私は⑩の黄筌画とこれとを交換した。画面上方に宋太宗（趙匡義）の「嵩牛」の三字があった。それ以後、兩浙地方の人家の屏風は、みなこの黄筌画の牡丹図で、眞贋を見分けるのが難しかった。それは押絵貼りの屏風ははがれ易いからである。

⑮米芾家 懷素「書帖」絹本。⑯同家 晋人陸機・衛恒を摹写した

「書帖」。戴嵩「白牛図」⑭と交換して入手したもの。

それらとその他幾種類かの書帖とは一緒にして劉涇のところへ行った。

⑯王詵（晋卿）家 韓幹画馬「照夜白図」。この画には「王侍中家物」と題されていた。王詵はこの画と二通の度牒とを顔眞卿の書帖一帖と交換した。朱巨川が私に語ったところによると、劉涇は山形の石硯一面と「照夜白図」とを交換して、戴嵩の白牛を入手するや、みづから「韓馬戴牛」を入手したと言つて喜んだ。ただしやはり杜荀鶴と章得象（鶴と象）が足りない。劉涇は次のような詩を一首作つた。「元章（米芾）の好古は人に過ぎ、書画は世を驚かして起つ。余歌を作りて云う。天下奇人を愛すること量るなし。奇は人に諛わず奇は相を解く。奇人と奇物とは方に合璧。乞う世間の人物の様を与えんことを。六朝と唐盛と始めて兼得す。訪古と知名は已に蕭爽。人亡び物喪んで衰夢に付す。想を注ぐ后来好尚に逢わんと。元章の心自ら秋月を鑿る。一路なお行く九霄の上、家時に菜色し斗粟無し。書画は奇奇たり世人望む。譬えば大海に百宝を沈むが如く、爾輩は風に乗りて之を浪に得たり。二王褚陸已に天作。老顧の如来更に天垂るるを。珍犀瑞錦は蘭苙を扶け、龍は躍り鸞は驚き翹翹を訶す。金仙詎んぞ敢えて触るるに手を以てせんや。雪子と玉人は聊か掌に置く。余家は僻素にして最も沈着なり。舎を退きて師に還りて旁り難きを覚ゆ。世人は往往力能く幹たり。未だ免れず蝦の終に惚恍た

るを目するを。機と偽謬を緘じて各おの臣妾たり。未だ観ず堂堂たる筆中の王を。袖間に渋縮し気は線の如し。浮几明窗謾りに瞻仰す。

從來所有す万銭の價。臭帑に即かず当に火葬すべし。心を妙絶に傾け豈に勝を求めんや。妄りに臨摹を意うは須からく殺謗すべし。端居して自ら号す書一品。好事は封するが如し絵三藏。諸郎は青出して即ち護持す。未だ飢を充たして謬の駟と爲るを肯んぜず。〔書史〕は薛道祖の詩を載せて云う。「寧馨動破す千金の資」と。是れなり。

余は衰えて二物を高閣に置く。子は之を専らにすべし世に兩つ無し。書來り詩往き但だ悠悠。塵土は人を欺き正に惆悵たり。私はこれに答えて次の詩を作った。「劉郎（劉涇）の画を収むるは早く甚だ卑し。折枝花草は徐熙を首とす。十年の後始めて道を聞く。吾が韓戴（韓幹・戴逵）を取りて神奇を爲す。邇來白首道輿に進む。学者は信に有り髓と皮。始めて知る十襲の但だ壁を遮るを。牛馬は便ち幣帷を裏むべし。峨峨たり太平の老寺主。白紗を首に帽いて冠蕤無し。武士は後に列して肅たり大劍。宮女は旁に侍して修眉を顰む。神清たる眸子は欲の寡きを知り、齒は露わに唇は反りて法は饑を定む。世人は服を見て摩詰に似せたり。六朝居士の衣を知らず。後人把る勿れ唐突を乱すを。梁時の筆法了として知る可し。道子之を見て必ず再拝せん。曹劉は何物ぞ藩籬を望む。本は第一に当る天下を品す。却つて顧筆に緣りて漣漪在り。」この時、私ははじめて劉涇に「梁武帝像」を入手したことを知らせた。この画は今も趙忠恕家にある。

⑩魏泰（道輔）家 徐熙「飛鶉図」。澄心堂紙に画いたもの。一羽の

飛鶉が生きているようだ。

⑪同家 智永「掃田賦」。眞草で書かれておりめずらしいものである。

⑫范大珪家 「折枝梨花図」。もと富弼（1004—1083）家にあつたもの。古人の作品であるが、江南や蜀人が画いたものではない。

⑬蘇舜欽（子美）家 畢宏「山水図」一幅。画風は奇古で、数行に亘る題辭があり、そこに「筆勢凶險」とあるが、その通りである。

⑭王敏甫家 李煜（重光）「四時花図」紙本横卷一軸。四季折々に李煜がみずから書写して、事物が変転する意味を論述したもので、文章一篇と画一幅とから成り、書体も若書きであり、花は清麗で愛すべきものである。

江南の周文矩の画く士女は、顔容は全く周昉に似ており、衣紋は戦筆（顛筆）を用いて画かれている。これはたしかに布文を表現しており、この点で周昉と区別されるのである。周昉の筆致は秀潤で匀細である。

⑮沈括（存中）家 唐人の壁画兩大軸。一つは手を一本と顔を一面だけ画き、他は半身だけを画く。これは画を学ぶ人が、画き難いところを画いたもので、遂にはこれは誰誰の眞迹だと題してしまった。

⑯蘇洵（及之）家 「茴香一枝図」。古画であつて蘇耆（国老）が題して閻立本の画としてゐる。

⑰宝月家 李成画四幅。一人の文人が騎馬、一人の小童がつき隨つてゐる。その清秀さは王維の画く孟浩然のようであり、李成の画く

人物でこれ以上のものではない。李成のその他の人物画、例えば妖怪や賭徒や村民など、藝人のやるごときものは皆な許道寧が専ら李成の画を摹していたときに画いたものである。

⑩海州劉家 王獻之「符篆及神図」一卷。李公麟（伯時）の言うところによると、海州劉先生は王獻之が画いた「符及神」一卷を収藏している。呪語は小楷を用いて書し、五斗米道に關係するものである。李公麟は一目みるとすぐ摹写させて欲しいと頼んだが、承諾してもらえなかった。李公麟の子が金陵に住んでおり、その妻と王安石の妻とが姉妹であったので、陳元興が金陵の鎮守となつたとき、私は彼に頼んで尋ねてもらつたが、だいぶ前にある貴人がもつて行つたという回答であつた。貴人が誰かということも結局わからなかつた。

⑪蔣永仲家 韋偃「松図」一幅。無数の枝や葉が画かれており、一年をついやさなければ画けないものである。幹や枝の鱗のような樹皮も一一写實的に画かれていて、筆致は細かくまろやかでしつとりとしてゐる。

⑫梅澤家 張璪「澗底松図」。葛氏の旧藏にかかるもの。私は人に頼んで買に行つてもらい、それから自分で取りに行つてきた。

古代の絵画は唐朝の初期になるとすべて生絹に画くようになった。吳道子・周昉・韓幹から後は、すべて熱湯でもつて絹を煮て半熟とし、それに粉末を加えて、銀板を槌で打つように槌で打つ。それ故人物を画くときに細かくはつきりと筆を使うことができるのである。

現代の人々は唐代の画を収集するとき、必ず絹で見分けようとする。絹の織り目が粗いとこれは唐代のものではないという。これは全く誤りである。張僧繇の画や閻立本の画で世間に収藏されているものはすべて生絹に画いたものである。南唐の画はみな粗絹であつて、徐熙の画の絹は麻布のようである。

画の裏打ち（裝背）に絹を用いてはいけない。破れたところを補修するとき用いると、絹が新しいうちはやわらかくて卷子を巻きやすいように思えるが、時間が経つて絹が硬くなると、画卷は硬い絹にあたつて、破れていないところまで破れができてくる。大変惜しいことである。書について言えば、昔の人はその文字を愛惜し、それ故、行間に筋をひき迹をつけ、字があたかも筒瓦の中に入つてゐるかのようにして、破れてぼろぼろにならないようにする。現代の人々は古代の書を手に入れると、かえつて絹か絹（たぬ）を用いて帖を裏打ちするが、行をきざみ込んだところは一時的には平直になつても、しばらくすると字の上が裂けてくる。大変惜しいことである。紙にかかれた書画は、絹で裏打ちをしてはいけない。熟絹の新しいものでも結局は硬化する。紋様を織りなす糸が書画の表面ををこすつて、作品の表面に絹の文様があらわれることになる。これは絹を用いて骨組を作ることであり、時間が経つと紙が毛羽立つてくるが、これは絹がこすするためである。裏打ちの紙を用いると、書画は時の経つにつれてすり切れてきて、墨色は絹の上に残る。王詵（晋卿）も以前は絹で書の裏打をしていて、はじめは悪影響があるとは思つて

いなかった。しばらく経って、桓温の書を取り出して看ると、紙上の墨色は磨滅して、絹の紋様が紙を透かして見えるありきまで、大変残念がった。そこで王晋卿は歙県産の薄い紙で覆って収藏した。そしてその後は絹を用いて裏打ちすることはなかった。白い絹が百片あれば、必ず好い画がある。絹の織目はそれぞれ異なっている。

長幅の横巻は裂け目が横に入る。横巻の裂け目が縦に入れば、各おのその軸の方向に従って裂けるのである。縦に裂けるのは一本の糸に関わることでなくて、時間が経つと巻は両端から裂けてばらばらになり、断片となって接合できなくなり、毛羽立たず、摘むとばらばらになる。偽作はできない。偽作はすっきりした切口が真直に糸に当たっており、両端は旧いものを用い、毛羽立っているが、摘んでもしつかりしている。濕った染色が糸の間に残っており、乾燥すれば烟の臭いがあり、(色は)上が深く、下は浅い。古い紙や絹にはふつう古い香いがある。

⑩劉子禮家 盧鴻「草堂図」。劉子禮は錢五十万文で錢樞密家の画を五百幅買った。開いて見もしないですぐ代金を支拂ったので、錢氏は喜んだ。画が引き渡された後、調べて見ると、盧鴻自筆の「草堂図」だけが十万文に値するが、その他は平凡な作品が多かった。

小八分の書体で書かれた詩句の一幅は、用筆が行書と草書のように、非常に変っている。現在ではこのような書体は存在しない。

⑪宗室趙君発家 閻立本「太宗步輦図」。錢七十万文で購入し、熟絹でもって画の上から下まで裏打ちをしたが、梅雨の時期を経過した

後、両側が脱落し、画面もぼろぼろになった。

文彦博(1061-1097)は古画の裏打の絹(古画背)でもって箱を作った。その気持は裏打の絹が大切に惜しいと思ったからである。しかし絹を貼って裏打ちすると、破れるものそれだけ一層早い。今の人の屏風や通俗画は、一二年も経つと断裂してぼろぼろになる。箱は壁画を収納するため、作られたものである。書画は時時巻いたり舒いたりすれば、しばしば人の手に触れるので、自然と傷まないものである。長い間展げないでいると、軸にそってひびわれ裂けて脆くなり、貼りつけて補修してもうまく行かない。

⑫王球(夔玉)家 兩漢から隋に至る「古帝王像」。形状の非常に怪異なものもあるようだが、残念ながら私はこの作品をまだ見ていない。買い上げて宮廷内の図書館に収藏さるべきものであろう。

檀香は濕氣を避けるので、画には必ず檀木の軸を用いると効果がある。箱を開けると芳香があつて糊の臭いせず、またよく蠹虫を防除できる。もし軸先に玉を用い、軸木に古い檀木を用いると、軸が重くなる。そこで逆に、軸木を二つに割って中を剝つてそれを合わせて軸木とすれば、削り取った分だけ軽くなって画を傷めない。

通常の巻物には必ず桐や杉で軸木を作るのがよい。軸木が重ければ絹を傷める。軸先に金銀を用いるのは宜しくない。俗っぽい盜賊を呼び込むこと、それは漢の桓帝や靈帝の墳墓のようなことになる。金銀の代わりに水晶で軸先を作ればよい。掛幅は必ず両端のおもりが重くなければならない。蜀の青圓錢の絹や双鷲の錦は最も俗っぽ



く、古画の表装に用うべきではない。現代の画家の作品を表装して座敷を飾るのもまた俗っぽい。

蘇木スオウを用いて軸木を作るとき、石灰を融かした湯でもってその色を変え、時間が経つにつれてだんだん良くなる。それに蘇木スオウは軽い。動物の角で作った軸先は虫が付きやすい。また、軸を開くとたいてい湿った臭気がある。檀木と犀角とを一緒に箱に入れておけば、共に古香を発する。紙や絹は古くなると自然に古香がある。

范寛の山水画は広大で、恒山や泰山のようである。遠山は真正面から画くものが多く、曲折しつづつ崩れ落ち、形勢に動きがある。晩年には用墨が非常に多くなり、土と石との区別がはつきりしなくなった。宋代では勿論范寛を凌駕する画家はいない。范寛の溪谷は深山の奥から流れ出るよう、水音がきこえてくるかのごとく思われる。また雪山を画くときは、世間で王維の画といわれているものに全面的に則って画いている。

王士元の山水図は、漁村や水辺鳥嶼や雪景を画いていて、江南の人の画に似ている。

⑫王鞏(定国)家 王士元画四幅。後に王鞏はこれらを王詵(晋卿)に与えた。王詵は王維の作品だといっている。趙叔盎(伯充)家にそれらの摹本がある。

⑬米芾家 范寛の画。

⑭米芾家 僧夢休画「雪竹図」。私は范寛の画二幅を、僧夢休の画いた「雪竹図」一幅と交換した。この「雪竹図」は巨石が水中に影を

映し、下方に数片の落葉が水面に浮び、傍らに枯木が一本あってやはり水に影を落している。

⑮蔣長源家の章鑿の「馬図」。私は夢休の「雪竹図」を、蔣長源家の章鑿の「馬図」と交換したが、そのとき他に更に十一種の物を送ってやっと手に入れたのである。蔣長源はその後、この夢休の「雪竹図」を王詵の所蔵する他の作品と交換した。

⑯蔡勝道家 夢休画「竹図」六幅、長さ一丈余。非常に立派な作品で、屋敷の梁に掛けなければならぬほど長大で、その画を見ていると、あたかも茂った竹の下に坐っているような気がする。

⑰濮州李迪(復古)宰相家 鍾繇・王羲之のコレクション。私はまだ見えないが、鍾繇と王羲之の収蔵が非常に多いという。李文定(迪)家の画のコレクションは三等のランクがある。上等の画には自分の名を書き込み、その上に自分の名の印章を捺している。中等の画には自分のあざな(字)を書き込み、その印章を捺している。下等の画にはあざなを刻した印を捺し花押のみである。

⑱江東の漕司の李孝広(世美)家 鍾繇・王羲之の書。以前、これらの作品を、金陵で新しく表装し直して、もとの表装の裏打ちの紙をとりはずしたところ、その紙は唐人の門刺(褐見のときに用いる名刺)を打ち直したものであったと李孝広の孫の李奉先が教えて呉れた。私は最近太常寺の官に任ぜられたので、これらの作品を見ることができたのである。

王欽若(定国、冀国公に封ぜらる。962-1025)は、収蔵の書画す

べてに「太原欽若図書」の印章を用いたが、書画の品等については精良なものは極くわずかであった。私は以前に蔣氏（蔣長源か）からこの鍍金を施した大印を入手したが、後に劉巨済が借りていつて、未だ返して呉れない。

趙大年（令穰）は南唐の「集賢院御書印」を入手した。この印は墨汁を用いて書斎（文房）の書画に捺印したものである。

趙大年（令穰）は古い絹本の横巻の經典や書画を收藏しているが、これらはみな精良さという点では当時の西昇経を凌ぐものであった。馮京（当世）は、王鞏（定国）に頼んで西昇経の表装をさせたが、その古い絹の裏打ちの紙の四五枚重なっているのを分けて剝がして、それを（裏打ちの紙に透写された西昇経を）表装して別にもう一巻を作った。

道士牛戩の筆致は粗豪で放縱であるが、俗っぽくなく、画の品格はそもそも艾宣や惠崇や宝覺や張経より上である。

李甲（景元）はみずから華亭逸人と号し、秀逸な筆致で翎毛（禽鳥）を画き、意表をつく趣がある。樹木はうまいとはいえない。

范大珪（君錫）は鄭国公富弼の女婿である。私は彼と一緒に汴京の相国寺に行き、行きつけの店で、七百両の銀子を支拂って一幅の雪図を買った。それは傷みがひどかったが、十分に古いもので世間の人々のいう王維の画に似ている。折から劉瑗（伯玉）に会うと、彼は笑いながら何を買ったのかと問うた。そこで私は多くの人々の前で画を開いて彼に見せた。彼は誰が画いたものかと尋ねたので、

私は王維の画だと答えた。彼はそうだといい、「たまたまさっきこの店に行つたがその画を看ることができなかった。まさか行き先が決つていたわけでもあるまいに。」といった。私は范大珪の家人に貸し、しばらく持つていたが、范大珪とともにいなくなつてしまつた。翌日取りに行つてみると、范大珪はすでに表装するために洛陽に送つたという。同行していた梅子平は、「私はあなたが買ったことを証言する。役所に審理を申し立てよう。こんな理不盡があるものか。」と大いに立腹した。私は笑いながら「范大珪は私の古くからの友人だ。」といい、そしてこの画を范大珪に贈与した。それからすでに二十年が経ち、范大珪がなくなつてから十年経つ。今この画がどこにあるかは知らない。

⑳趙叔盎家 張瓌「松石図」一軸。もと李公焞家にあつた。すでにぼろぼろ（破糜）になつていて、表装をし直すことはできない。

㉑葉助（天祐）家 蜀の范瓊「梁武帝寫誌公図」一幅。武帝は白い冠をつけ粗衣をまとつてゐる。晋朝は白色をとつとび、宋・齊・梁・陳の各朝でも目にするならわしは異なり、それぞれに尊尚する色がある。皇帝はみな白帽をかぶる。末世の文物はこのようなものである。まさか国君の位がどうでもよいというわけではないであらう。顧愷之が維摩像を画くときにもやはり白首とする。周人は五行の木をその徳とし、冠はみな青を尚ぶ。孔子は「私は殷人であり、宋に生まれた。だから章甫（黒色）の冠をつける。」といった。これは殷王朝の制度であり、殷は水をその徳とし、それ故黒（玄）を尚ぶ。

玄瑞の服も章甫の冠もみな黒色である。夏王朝の殷と商王朝の湯王の子孫に、周王朝が土地と爵位を与えて以後、彼らは自分達の正朔を奉じ、自分達の文物を用いた。漢王朝は火の徳にもとずき、赤を尚び、赤色の頭布を着用した。舜は土徳で、黄を尚び、黄色の冠を着用した。凶画は事物の種類に即してそれをはっきりと現わせば、平凡にはならない。

王通（元經）の書の「晋・宋・齊・梁・陳」は三、余有りの意である。（王通元經書晋宋齊梁陳三有餘意也）

⑩鄒極（適中）大夫家 陳常画。江南の陳常は、飛白の筆法で樹石を画き、清雅で洒脱な趣きがあつた。人物はあまり巧くないが、折枝花は軽妙な筆致で墨をさつと塗抹して枝を画き、そこに色彩で奔放に点描して花を画き、宛も造化の妙を奪つたかのような自然な画き方で、本朝の妙手といえる。鄒極が陳常の作品を収蔵している。

池州の画家が「秋浦九華峰図」を画いているが、清雅な趣きがあり、董源の画風を学んでいる。

⑪高公綏（君素）家 張瓌筆「潤底松山上苗」山水図一軸。

⑫同家 韓幹筆「于闐所進黃馬図」一軸。この馬は首を翹げ目を挙げ、雄壯で傑出しており、現在はこのような馬はもういないと自分は思う。そこで次のような賦を作つた。「唐の牧の至盛に方り、天骨の超俊あり。四十万の数を勒し、方に隨いて以つて色を分つ。此の馬其の中に居りて以つて鎮と爲す。目は星角にして電発す。蹄は抗踏して以つて風のごとく迅し。鬣は龍のごとく、顛して孤起し、耳

は鳳のごとく、聳えて双つながら峻なり。翠華建ちて出歩す。闐闐の下にして軽噴す。驚群を低くみて嘶かず。秋風を横ぎりて以て独韻す。若し夫れ溪を躍ぶことの舒急、架を冒して叛を征するは、直に突けば則ち建徳は項を繋られ、横に馳すれば則ち世充は領を断たる。皆な絶材にして以つて徳を比らべ、敢えて蹶を伺いて以て吝を致さんや。豈に浪りに首宿の坡に逐うを肯んぜんや、蓋し常に八方の駿を下視せん。高標にして雄跨し獅子は躡を攘り、逸気は下衰して照夜（照夜白）は穩なるを矜る。是に於いて風は靡に格は頽え、色は妙に才は駘ろえ、仗に入りて動かず終日坏の如し。乃ち玉もて銜飾となし、繡もて鞍僂となすを得。棗秣・粟麥、肉張・筋埋、其れ徳に報いるなり。蓋し偷盧が盗を噬み、蹇を策つて柴に勝えせしめ、黃鳩を鑄て水を吐かしめ、白澤を画いて以つて災を除くに如かず。但だ馳垂して節に就き、鼠伏して猜を防ぐを覚ゆ。妬心は厲なりと雖も、馴れて斯の諧を号す。首を俛して以つて世を畢えんことを誓い、未だ櫪に伏せずして以つて懷を興す。所謂る英風は頓に盡き、冗杖は常に排ぶ。嗟乎、若し駿骨を市せず、龍媒かくの如き馬を致さざれば、一旦天子の朔方に巡し、番嶽に升起、四夷の塵を掃し、岐陽の獵を較べて則ち飛黄・腰裏、雲を躡み電を追うこと、何所よりして遽かに来らんや。」

⑬同家「雪山図」。唐の蜀中の雪山を画いたものがあり、世間では王維の作といっている。劍門関図と雪景は五代の作品である。

⑭同家「唐画山水双幅」。短幅である。

⑬ 同家徐熙「海棠図双幅」二軸。江南の装堂画で富麗で生意がある。

⑭ 趙叔益家にも⑬と同じような画が一軸ある。

⑮ 王誥(晋卿)家。江南の画「小雪山」二軸。私の「歳餘小木図」と取り換えた。この図は一筆をぐるっと廻しながら枝葉を画いており、草書のようなもので俗っぽくない。後に「小雪山」の画を蘇之友が収藏していた書と交換した。李伯時(公麟)が言うには、この「小雪山図」は彼の父が収藏していたもので、その後行方が解らなくなっていたが、王誥家に入ったことは知っていた。しかし私のところに移っているのは知らなかった。とり換えることが出来なくて残念である。王維の作というのは間違っていると。

⑯ 米芾家、易元吉筆「花鳥図」。放逸な筆法の彩色画で書を写実的に画き、上方に一羽の鸚鵡が飛んでいる。王誥が借りて帰って返して呉れない。

⑰ 米芾家、徐熙筆「風牡丹図」。葉は千片以上もあるのに、花は三つしかない。その一つは正面にあり、他の一つは右側にあり、もう一つは枝や葉が繁ったうしろにある。石にあいた穴はまろやかで、石の上に猫が一匹いる。私は猫を画くのが嫌いで、何度も猫を切り取ろうと思ったが、後に唐林夫の持っていた硯と交換した。

⑱ 蔣長源家、黄筌筆「狸猫顛勃荷図」。蔣長源は二万文でこの画を買ったが、非常に巧みな画である。

⑲ 薛紹彭(道祖)家、「金盆鶉鳩図」。花の下に金盆が一つあり、その傍に鶉鳩が一羽画いてある。どうしてこの画を名画といえようか。

笑い出したくなる。

⑳ 同家、「吳王斫鱗図」。吳王は江南の服装をして金冠を戴き、衣服は右衽の紅衫で、大きな楊の上に坐って両手をすり合わせている。吳王の衣服が右衽であるのは間違いである。

濟州の人が朱浮の墓を発掘した。石壁の上に車服人物が彫り込んであり、平素地位に従って乗るものは「府君作令時車」とある。これは弯曲した轆をもつ一頭の馬の牽く馬車で、車輪は少し地面から浮き上っている。上に蓋があり、その下に一人が坐し、三梁冠を戴き、顔と馬の尻尾が同じ高さで、みずから手綱をとり、馬は尻尾をかくす裙をつけており、一人乗りの馬車である。又、「作京兆尹時四馬」と刻銘のある馬車は、轆は小さくて弯曲し、車はやや高く、蓋に坐り、儀衛兵が多勢いて、「解明隊」と稱す。またある隊は、隊員が各十人である。騎馬が一隊を作っており、そのうち一隊は背に鏡をかついでいる。その他多数あつて全部記述することは不可能である。従者はみな冠をつけている。

唐人の軟裏(軟巾裏頭)。礼楽が闕落してくると、士人として賤服になれ、俗と同じことを美とするようになる。私ははじめこれに面喰らったが、歴史家が留意するのを俟つことにすべきだろう。老人がいうには宋朝の初めには士子はみな鹿皮冠をかぶっていた。これは冠弁の遺制である。更に頭巾と掠子が無ければ、必ず篋を帯行した。だから帽をかぶるには、まず必ず篋子でもって頭髪をくくらなければならぬ。客が訪ねてくると、頭を梳いて帽をかぶることをことわ

り、皮冠を脱いで、髪をうしろまで梳いて形をととのえてから幞頭巾子の中に入れ、篋で髪をきちんとしてから出る。客が帰るとまたもとにもどす。その後、絲絹で掠子を作るようになり、髪を梳いて帽をのせ、出入する時にあえて年長者に見せないのである。家に帰ると、門のうしろで掠子を取り去り、篋で髪を束ねてから中へ入る。年長者が帽を脱がせて彼を見て、非常に不謹慎だと思ふのを心配するわけである。またその後、紫羅でもって無頂頭巾を作り、これを「額子」と呼ぶようになった。なお敢て平民の頭巾をかぶらないのである。その後、擧人が紫紗羅をもつて長頭頭巾を作るようになり、背にまで垂れるようにして平民たちと区別したのである。今では士人はみな平民の花頂頭巾をかぶっており、次第に幅巾、逍遙巾、額子をつけ、それが不敬とは見做されなくなった。衣服は裏肚勒帛(絹製の腰帯できつくしめる)がよいとされた。近年ではまた、半臂の軍服を甲の上にかぶせ、帯をつけないのを「背子」と呼び、これを礼節を重んじると考え、なければ礼がないとする。今の士人の衣服は大帯子をむすび紳を拖らすのが礼節ありとされ、帯子をむすばず左衽であるのはみな夷服であることを知らない。これはきつとしかるべき君子が制度をつくつたためであろう。漢の石刻では従者巾と殷母追巾とは同じである。今の頭巾は、もし花頂を作らなければ四帯をつけ、両帯の小なるものは頭髪上にあり、両帯の少し大きいものは下垂するのがその制度である。礼というものはほかにありやうがなく、君子が制定するだけである。私は漣水(県令)となつた時、

そこは古くは除州に属する地であつた。人々は頭巾を脱いだ下に、必ず鹿楮皮冠をつけていた。これは古代の習俗の着するところで、本当に美とするに足るものである。また唐初の絵画に画かれた擧人は、必ず鹿皮冠をつけ、縫掖の大袖で黄衣の膝までの短いものを着て、下に長白裳をつける。監察御史蕭翼は、越に來て僧辯才に會つたとき、黄衣大袖を着るのは山東の擧子のものであるといつた。まだ軟裏しないのを欄といつたことを證明するに足りる。李白の画像は、鹿皮冠をつけ大袖の黄袍服を着ているが、やはりそうした制である。

また「麟鳳図」があり、半分は篆書で半分は隸書でかかれ、每行九字九行を規格として、「惟永建元年秋十月饗」とある。当時の山陽郡(山東省)太守の河内(河南省)の孫君はこの碑が礼に合わないのを見て、掾(属吏)に重ねて造らしめ、初めに瑞象の麟鳳のことを記した。その銘文には次のようにいう。「漢威徳中興、即政二年、辛酉之節、首歴四十、青龍起云々。三月季春、爰に碑石を易立し、礼に順い文を典し、九九度数をもつて万世に常存せんとす。」と。また他の銘には次のようにいう。「天に奇鳥有り、名を鳳凰と曰う。時に有徳に下る。民は富み国は昌んなり。黄龍と嘉禾と、皆な隠藏せず。漢徳は巍巍として、永く布きて宣揚す。天に奇獸有り、名は麒麟と曰う。時に有徳に下る。国を安んじ民を富ましむ。忠臣は節を竭くし、義は以つて身を修む。愆を聞いて善を來たらしめ、明明たり我が君。」と。九字九行の数が何の典拠によつたものかわからない

が、きつと識る人がいる筈だ。麟鳳の形状は、頭上に一角がまっすぐに伸び、高さは足の如く、翹ること悪馬のようである。鳳凰の冠は高く、尾は長く非常に奇怪である。私は次のような題辭を詠んだ。「篆に非ず科に非ず、璞已に形容を彫り、振振また蕭蕭たり。曾て忠厚に因りて方に徳を周くし、坐して評議を想いて舜韶を覽る。漢徳は已に衰え、還つて孽に応じ、魯邦既に弱くして妖を爲さず。虚齋は自ら是れ人を驚かして玩び、雄孤の怒鵬を逐うに勝えず。」と。嘉祐年中、一人の貴人が江南に使した時、韓幹の一匹の馬の画を携えていった。帰路采石磯を渡る時になつて、三日間大風が吹き渡ることができない。渡ろうと思うとまた大風が吹く。そこで中元水府廟に禱つて典祀した。その晩、夢に神が告げていうには、馬の画を置いてゆくなら、渡るのを助けようと。翌日、廟に詣でて馬の画を獻納した。すると大風は止み、ようやく渡江することができた。今でも馬の画は廟にかざつてある。このことから天才は神が教化できずに、天が生み出したもので、自然に生まれてきたことがわかる。天才は秀氣に乗じて才を成すのであつて、天は資けることができず、神として化することができない。だから玉楼が完成すれば、必ず李賀が文章を記すのである。

蘇着の子供は、態度といい表情といい、画にかいたようで、目は漆を点じたように黒く、顔は脂を凝らしたように白くやわらかく、天上の男仙人のような相貌は、画ではそれを表現することはできない。才能と度量があり学が好きだつた。ある日、相国寺でその兄に

会つて、その安否を尋ねたところ、己に死んだという。私が、まさか神霊がその子を奪つたのではあるまいなというと、彼が大変驚いて次のように話した。「ある朝、その妻が嫁入りして結婚するのを夢みて気分が悪くなり、またある朝、神が彼のために婚礼を行うことを夢に見て、それで病氣になつた。医者は治すことができないといひ、翌日死んでしまつた。あなたは神人ではないのに、どこからこの事を知つたのか」。

吳中に画が好きで士大夫がいて、画のうちの装裱の古いことを鑑定辨別の目じるしとした。なお必ず名画だとして、古人の名を書き込んだ。かつて「七元図」一幅を入手して、それに「梁元帝画」と題した。また「伏羲画卦図」を入手して、「史皇画」と書き込んだ。どこで購入したのかと尋ねると、彼等の子孫からだといふ。黄帝の子孫とか史皇の子孫とかいうのは全くはつきりしない話である。もし史皇の子孫であるとすれば、きつと辰園において入手したのである。その他の画についてもこのようであつた。曾て私の家の顧愷之の維摩像を見て、少しも筆法を論じないで、この種の近代の画は大変容易に入手できるといつた。そこでそばの者に、明日胡常にたのんで二幅を買わせようといつた。数日後、果たして平凡な佛画二幅を買い入れてきた。「顧愷之維摩」、「陸探微維摩」と題してある。顧愷之と題したものは、文殊がなく、維摩が一人だけで、これはかつて瓦棺寺で見た像であつた。他の一幅には文殊と睡り獅子があり、それ故陸探微といつたのであつて、かつて甘露寺の陸探微に目を見

開いた獅子があるのを見たからである。このような収蔵品は章得象や杜荀鶴の手合いのものである。杜荀鶴の兄は画を鑑別する能力があった。彼は弟の弊害は非常に大きいといい、遂にある日彼は全部を焼いてしまった。幸いにもなくなってしまうが、もしそうでなかったならば、梁元帝が夢に秦始皇にまみえたようなことが起ったかも知れない。士大夫はまさにこの事をもって戒と爲すべきである。収蔵する書や画は必ずしも多くなくてよい。百幅の平凡な作品を買う費用で、一幅の好い画を買えば、費えとはならない。五環の銅銭で百幅の贖物の画を買っても何の役にも立たない。黄卷の五經や赤軸の三史は抄録することができる。画でこのようなことができるならこのような佛画などは渡江のときに水神に投げ与えることもできよう。

漣漪の藍氏の収蔵する晋画の渾天図は、長さ五尺、素画で天を画くのに円形を作っておらず、別に一箇の小圈を画いて、その中に北斗星・紫微星をおき、見易くなっている。また星辰の排列・位置は、通常の渾天図と異なっている。私はかつて天説一篇を著わして、天地日月の周囲の形状や、月の盈虧の実質を探究した。又晝夜図六十本を作り、それによって潮水が漲落する時間と、大小を探究した。また晝夜六十図で、六經を引用し、古今百家の星曆の妄説をしりぞけた。また潮説を著して、それでもって盧肇と皮日休が佛教を粉飾し、佛に借りた説が誤りであることを証明した。私の著作や作図は御府（朝廷の図書館）に献上し後世までも伝えることにしたい。

余杭で印刷された「五声音六律十二宮旋相爲君圖」は非常に精緻である。そもそも五音の声は五行に由来する。これは自然の理である。管仲は深くその要旨を明らかにし、その外見の形を表現したが、それは太平の具象のようなものであった。音楽は必ずここからはじまる。沈隱侯はただ四声だけを知っており、その宮声を求めたが捉えることができなかった。そこで平声を二つに分けて、後学の人々をだました。このときからおよそ千年あまり、訂正する人がいなかった。愚かな人たちはその見解を祖述して、字母を創作し、昔の人の説をうやうやしく守った。陸徳明もまた、呉音を復活してその祖先の説を伝え、それ故、東と冬の区別を設け、中と鍾とを別ち、象をもって契となし、上をもって賞となした。その呉音によって後学の人の耳を誤らせ、誰もそれを是正する者がいなかった。そこで私は、東西南北と中央の五方をもって五行にあて、五音を求めた。ようやく孟・仲・季の各位から一声（声調）を得て、金によって土に附随せしめた。このようにしてはつきりと各文字が調声をもち、五音はすべて備った。平上去入の名称を削除し、宮商角徵羽の名称を用い、声はあるが形はなく、たがいに假借するのである。千年の後には、疑問が明かになり、その根源はあらわれ、書をなす鬼神は姿をくまらずところが無くなるであろう。著作は「大宋五音正韵」と名づける。それでもって音律を制定し、楽曲を作り、陰陽の融合した太和を招き、天下太平を成就する。私はこれを名山に藏して、百世の後に私と同じ考えの人があらわれるのを待ち、いたずらに見

識のあさはかな人たちのために画策をしないのである。

佛像や故事図を鑑賞するときには、勸戒の思想がある作品が上である。その次が山水図で無窮の趣を備えている。とりわけ烟雲霧景を画くものが佳い。その次は竹木や水石を画いたもの、その次は花草を画いたものである。仕女や翎毛（禽鳥）や貴人の遊戯図はただ遊び半分に一寸見るだけのもので、清雅な境地の鑑賞には入られない。

⑭ 李孝端（師端）家、薛稷筆「二鶴図」。

⑮ 同家 李昇筆「着色画」一両幅。

⑯ 同家 「山水画」三幅。李文定（迪）の孫で、奉世の子の李孝端（字師端）は上記の画を収蔵しているが、山水画中の船は小さく、人物の画き方は精細である。その中の両幅は、林石があり、岸辺が

曲折し、茅亭や溪水のあるところ、幾人かの道士、ゆったりと寛ろいだ人がいる。人物はやや大きい、それがかえって小さな人物より巧くない。石の岸辺は自然にでき上ったようで、全く筆の跡がみえない。第三幅は、峰巒が高く聳えて、山頂はかすむように樹木が密生して遠林をなし、山崖の洞穴は、松樹が層層と重なる際にあり、松の木自体は円やかですつくと聳えるさまに画いているが、すべて筆の痕がない。前述の二幅の画は、歲月をかけなければ完成しない画で、このような細密で巧緻な画は、世間で見たことがない。大変密に茂っていて林の中に空白がないけれども、種々の樹木の葉は古い絵画にもこれに匹敵するものがなく、現代の絵画にはむろんない。

私が丁氏のところから入手した絵画とまったく同じものである。

⑰ 張翥（茂宗）家、唐画「嵇康広陵散図」。

⑱ 同家 黄筌筆「着色山水図」六幅。

⑳ 同家 徐崇嗣筆「桃折枝図」六幅。

㉑ 同家 周文矩筆「士女図」。

㉒ 同家 徐熙筆「鱖魚蟹図」。洛陽の張狀元師徳家には名画が多い。その係孫で南京応天府の通判張翥（茂宗）家で、唐画の「嵇康広陵散図」を見た。松石と遠岸が奇古である。故事が書きこまれている部分では「民」（唐の太宗の李世民的諱）の字が空欄にされている。同じ品格の画を世間で見たことがなく、実に良い作品である。上記の黄筌・徐崇嗣・周文矩・徐熙の作品にはすべて丁晋公（丁謂）がみずから題字をかき、印章を捺している。その他の画にはみな張狀元と張景儉の字の印章がある。

李成の淡墨はあたかも夢霧の中にあるようで、石は雲が動くように見える。技巧が目立って眞意が足りない。范寛の形勢は力強く立派であるが、その深い暗さは、夜の暗さか闇のようで、土と石との見分けがつかない。物のかたちは静かで上品であり、その品格は当然李成より上である。

関同の大観的な山（龕山）は、山河の形勢を表現するのが工みで、山峰には秀抜の気風が欠けている。

董源は峰頂を画くのが巧くない。絶澗や危徑や幽壑や荒野を画くと、おおむね眞意を多くあらわしている。



巨然の画は明るくでしっとりしていて、樹木は鬱葱としていて爽やかな気分が最も多い。鑿頭（山頂の小石堆）が非常に多い。

荊浩は雲中の山頂を画くのが巧く、その四面は切り立っていて高大である。

⑮王球（夔玉）家、「古帝王像」一幅。この画を見た一年後、私は畢宰相の孫の仲荀の處で、白麻紙を用いて画いた、装裱をしてない古帝王像の画を見た。仲荀がいうには、楊褒がかつてこの画を臨摹したものを夔玉が購入したのであって、画の上方に「之美」の印記がある。

趙叔盎がいうには、線（綫）が狭く、條が闊くて指の太さの半分あり、絲が細くてまわたのようであると、画帯を作っても毛ばたたない。刀を以って標装の中に刺し込んで絲綫の間を開いて、表装をおおい掛けた後に巻いて、縛れば、また画の心がなく、画の損傷を少なくすることができ、また画帯を折り曲げた痕跡もない。普通の画は、画の中ほどが損傷することが多いが、これは画帯で縛ることによって生ずるのである。書も腰部を損傷することが多いが、やはり同じ理由である。一寸括るだけで充分なのであって、力を使う必要はないのである。

⑯趙仲儀家 「廬山図」。皇族の趙仲儀が収蔵する半截の古い廬山図は、六朝画に近く、位置や寺院は、唐代や今の様子と異なっている。石には皴法を施さず、樹木の表現は格調が高く、舟を挽く人の様子や、舟の形や構造は、古今のものと異なっている。惜しむらくは完

全に残っていないことである。

⑰畢仲欽家 荊浩筆「山水図」一幅。

⑱畢仲游家 閔同画六軸。

⑲王欽臣の長子家 閔同画六幅。

⑳同家 董源画四幅。閔同画は古く非常に奇異な作品であり、董源の画は眞意があつて人に好まれる作品である。

㉑刀約家 董源筆「霧景図」四軸。

㉒林虞家 王維筆「霧図」六幅。

㉓同家 董源画八幅。

㉔同家 李成筆「雪図」。

㉕米芾家 曹不興筆「如意輪觀音図」紙本一軸。

嘉祐年中の三人の絵画蒐集について。楊褒と邵必と石揚休の三人は皆、画を酷愛し、力を竭くして収蔵に努めた。後になつて私は三家の画を見たが、石家の画が比較的優れており、楊家の画は「四世五公」の字印を捺して自慢しているが、一軸として佳いものがない。邵家の画に捺された印は非常に精巧で、篆字が印の傍にあり、大体において格調・品位は高い。少しでも江南の画に似ていると徐熙の作と題し、蜀人の画いた星神図には、閻立本、王維、韓滉などと題するが、これらは皆な抱腹絶倒ものである。邵必の孫が韓滉の「散牧図」を携えてやつて来た。双幅の上に二十余匹の驢馬が画かれているが、その出来映えは崔白などの画家たちには及ばない。画絹を深黄色に染めており、絲紋も緊密で、四百貫（四十万文）の値段が

ついている。画面の上部の左辺に胡粉でもって一片の札状の場所をつくり、その中に「韓晋公散牧図不疑家宝」と題してある。その上に「鎮江軍節度使印」一印が捺されており、これは油を用いた単印で、大きさは約四寸四方、文字は粗大である。下方に一印あり、ほぼ唐印に似ているが、大変小さく、文字もまた細い。人々は皆な冷笑して贗品だというが、長い間眞筆だと信じる人がいないうちに、邵なにがしは五万文で江氏に入質し、なくなつてしまった。だから私はためいきをついて、「華麗な大広間のすがすがしい朝、一群の驢馬が咬み合っている。これは一体どういう気分なのだろう」と云つた。

潁州の使庫に顧愷之の「維摩百補図」一幅がある。これは唐の杜牧が臨摹した後、潁州太守に寄付した画であつて、書斎の壁龕に掛け放しになつたまま、太守が持ち去らなかつたもので、いきいきとした画が人を照らすようである。前後の時代の士大夫家に伝来する維摩百補図は、これとは全く似ていないが、これは京西（潁州）において臨摹した画工が下手であつたためである。その屏風の上には画かれた山水は、林木は奇古で、彼岸に用いられた皴法は、董源画の皴法と似ている。そこで、人々が江南の画風を称賛することは顧愷之以来ずっと同じであつて、隋唐から南唐に及び巨然に至るまで少しも変わっていないことがわかつた。今でも池州の謝なにがしはやはりこのような画風の画を画いている。私は畢宰相の孫のところから隋画の「金陵図」を入手したが、これまた同じ画風をもつもの

米芾「画史」について（続）

である。そこで私は、顧愷之の画に「米芾審定是杜牧之本」と題書し、そして「撥発司印」の印をその上方に捺し、それによつて勾譚の刻石が人にとりかえられたと妄りに指摘されることを證明するのである。私と潁州の判官とは懇意であつて、彼に頼んで優秀な画工で臨摹する者を探させて、必ずしっかりと記憶して似させなければならぬ。全部で三度送つてもらつた蠟黄色の画本は、一筆として似たものがなかつた。もしかすると、朝廷の府庫に寄附し、国手（名人）に頼んで臨摹させ、それを世人に下賜してもらつて、千年の後までも伝わるのがよいかも知れない。これは丁度、唐の太宗の時のあの「蘭亭序」と同じで宋一代のすばらしい盛事ではなからうか。

⑭潁州公庫 杜牧筆「顧愷之維摩百補図模本」。

⑮米芾家、隋画「金陵図」（杜牧模本か）。

本物の絹の色は淡く、何度破損しても色は鮮やかである。人物の精神（面貌）の彩色も新しくみえる。ただ佛像は長らく香煙の薫れを受けているので、本の色は損われている。

絹を染めると湿つて香色を生じる。塵埃が絹の目に附着していると、至極簡単に見分けられるので、その時はもう一層色彩を上から施すのである。古い絹はたとえ破損しても眞直には裂けない。二三條のたていとが連なつているので、贗物を作ることとはできない。

⑯薛給彭家、「三天女図」。顧愷之の筆とされているが、実は唐初の画である。

⑰邵必家「維摩文殊図」。六朝画。

⑨ 同家 「西山十二眞君図」。やはりその次にくる。閻立本の筆と題されている。

⑩ 米芾家 徐熙筆「桃図」。私は相国寺で八面の銀で紙本の画を一幅買った。それは二本の桃の枝を画いたもので、緑葉は虫に食われて穴があいており、二枚の葉が桃の実の上に附いている。二顆の桃の実は紙素の上に高く盛り上がっており、これは徐熙の眞跡である。

⑪ 錢世京家 「謝靈運盤足坐像」。これまた奇古（古風で珍しい）である。

⑫ 高公絵家 「杏花両枝図」。ぼろぼろに破れてひどい状態である。作者の名前は記されていないが、その出来映えは徐熙や黄筌の画より上である。もともと私の家から高公絵家へ行ったものである。

⑬ 江州張某家 「李重光（煜）道装像」。神韻と風骨、風趣と筆力が兼備しており、顧宏中（顧闕中）の作品だといわれている。

⑭ 沈括家 畢宏筆「山水図」兩幅。一軸は、画面上方に、大青を墨と混ぜ、大筆を使用して直接塗りつけ、皴を施さずに天の高みを支える柱となる主峰を画き、画面下方には、半峰が画面の八割の部分に画かれている。もう一幅は、下方に向って僅かに傾斜する岩に洞窟が穿たれ開口し、曲折した欄干が険しい崖を廻っており、一筋の瀑布が流れ落ち、二つの大石が通路を塞ぐように盤踞している。一幅は、丸味を帯びた山塊が、中腹を雲で覆われながら聳え、その基部には幾つかの沙石が配されている。一人の童子が琴を抱えて、曲折する欄干に沿って山を転って去ろうとしており、一本の古木が奇

怪な形をした石にもたれかかるように生えており、奇古である。私は沈括が左遷せられて秀州に赴く日にこの画を見た。やがて彼が潤州に住むようになってから、この画はどうなったかと問うと、彼はすでに別の作品と交換して他人に与えたという。その画は遂に再び出てくることはなかったのだが、今なお常に夢の中にこの画を見ることがある。

「画史」に出てくる米芾の收藏品あるいは旧藏品は凡そ次のようになる。

- ① 顧愷之「維摩天女飛仙図」
- ② 戴逵「観音図」
- ③ 「英布図」
- ④ 王維「小輞川図」（文彦博家↓長安李氏↓）
- ⑤ 王維「辟支佛図」（張修家↓）
- ⑥ 李成「松石図」四幅（盛文肅家↓）
- ⑦ 李成「山水図」（盛文肅家↓）
- ⑧ 顧愷之「浄名天女図」（①と同じか）
- ⑨ 戴逵「観音図」（②と同じか）
- ⑩ 董源「霧景図」横幅
- ⑪ 李成「送与李冠卿図」扇面
- ⑫ 范寛「山水図」
- ⑬ 李升「山水図」（丁氏↓、劉涇家↑）

- ⑭唐人「楊子雲図」
- ⑮「甜榴図」(丁晋公(丁謂)家旧藏、徐熙筆か)
- ⑯唐画「韋侯故事図」(横幅六幅(石楊休家↑))
- ⑰徐熙「牡丹海棠図」(石楊休家↑)
- ⑱「古代書帖」(かつては晋唐の古帖が千軸あったが、今では百軸となり、そのうち極上品は十軸である。書帖一軸は名画十軸に相当する。)
- ⑲黄筌「風牡丹図」(王詵家↓、于鴻家↑)
- ⑳戴嵩「白牛図」(于鴻家↓、某家↑)
- ㉑懷素「書帖」(某家↓、劉涇家↑)
- ㉒「臨陸機・衛恒書帖」(某家↓、劉涇家↑)
- ㉓「梁武帝像」(趙忠恕家↑)
- ㉔張璪「澗底松図」(葛氏↓、梅澤家↑)
- ㉕范寬画(僧夢休「雪竹図」と交換)
- ㉖僧夢休「雪竹図」(蔣長源家旧藏の韋鑿「馬図」と交換)
- ㉗韋鑿「馬図」(僧夢休「雪竹図」ほかと交換して入手)
- ㉘王維「雪図」(范大珪↑)
- ㉙江南画「小雪山」(王詵家↓、蘇之友↑)
- ㉚「歲餘小木図」(王詵家↑)
- ㉛易元吉「花鳥図」
- ㉜徐熙「風牡丹図」(唐林夫家↑)
- ㉝曹不興「如意輪観音図」

米芾「画史」について(続)

- ⑳隋画「金陵図」(畢宰相の孫↓)
- ㉑徐熙「桃図」
- ㉒古画「兩枝桃花図」(高公絵家↑、徐熙や黄筌の画より上等)
- 米芾が書画の蒐集を行う名分としては、まず規準作を示そうとする。例えば王維の画について、世間では「驟綱図」や「劍門関図」というとすぐ王維の作とするし、江南の画家の手に成る「雪図」も王維だという。かくてその画は数え切れない程になるが、王維の画がこんなに多くある筈はないとして、筆致が清秀なものや世間でいわれている王維画とは異なるものを真迹とする。また呉道子についても、佛像というと呉道子の作とするが、真迹は四軸しか見ていないといつて、友人の蘇軾と趙令穰のものを真迹とし、他に王防家と周種家のものも真迹とし、友人の李公麟のものは繊細で弱く、呉道子の弟子の作品で世間にある呉道子の画は殆んどこの手のものであるという。また李成の画の贗物が多いのは、李成が政府の高官であるから、凡庸な人々がその名に仮托して画くからであつて、もし李成が普通の画匠であればこんなに多くの伝統作品はある筈がないとし、「無李論」を書きたいくらいだという。また米芾は、顧愷之を尊崇しており、晋代の画は何としてでも保存すべきだと考えており、自分の住居に「宝晋齋」と名づけている。また自身の收藏品についても、押印の種類を変えることによつて、極上品から次品までの區別を明確にしており、その收藏品には下品はないといつている。
- 次に米芾の蒐集のやり方であるが、書画は本来、価格を論ずるこ

とのできないものであるとし、書画を愛好する士人とは金銭でつき合うことはできないという。書画については、気楽に交換し合うのが自然で上品な態度であつて、何が何でも我が物にしようという蒐集のやり方は実に笑うべきものだという。それに書画というものは長く見えていると飽きてきて嫌気がさすものであり、時々新しいものと交換すれば、それが却つて相手方と自分の欲望を満たすことになるという。つまり、書画を士人との交遊の具と考えるのである。ところで「画史」の中には書画の価格が出てくる。例えば盧鴻「草堂図」は百貫（十万文）、閻立本「太宗步輦図」は七百貫、王維「雪図」は七百貫（米芾が汴京の相国寺中にある店で購入）、黄筌「狸猫頭勃荷図」は二百貫、韓滉「散牧図」は真迹ではないが四百貫、徐熙「桃図」紙本は八貫（米芾が相国寺中の店で買った掘り出し物か）などである。米芾が晩年までに賞鑑家たちと交換した書画は非常に多く、一一記載はしていないが、画面の上方に米芾の印記があるから見分けがつくという。また好事家と賞鑑家とは別にもので、賞鑑家は画が好きで、画について研究し、自分で画く場合もある。従つてその収蔵品はみな精良である。好事家はもともとそれほど画が好きではないが、財力があり、風雅を身につけようとして他人の感覚や知識に頼つて画を購入する。賞鑑家と好事家とはしばしば意見が対立する。収蔵する書画は必ずしも多くなつてもよく、百幅の平凡な画を買うよりも、その費用で一幅の好い画を入手する方がよいという。

米芾は絵画自体について具体的にどう考えているのであろうか。ジャンルについては、勸戒の思想のある佛画や故事画が第一で、次に無窮の趣を備えている山水画、それも特に烟雲霧景を画くものが良いとする。次が竹木・水石を画くもの、次が花草を画くもの、仕女や翎毛や、貴人の遊戯図はただ遊び半分に見るもので、清雅な境地を求めて観賞するものではないという。また牛馬や人物の場合、他人の画を一寸模倣すれば、すぐそれに似たものが出来あがるが、山水画は模倣しても巧くない。それは山水画が心で構想するものであるからだという。

米芾は又、古今の画家を取り上げて論評している。人物画については顧愷之、陸探微、吳道子、周昉。花鳥画については勝昌祐、辺鸞、徐熙、唐希維、祝某。山水画については荆浩、李成、関同、董源、范寛、巨然、劉道士。また真迹かどうか辨別し難いものとして、戴逵の牛図、曹霸・韓幹・韋鑿の馬図。その他、黄筌、易元吉、崔白、王友、鐔覺、程坦、侯封、馬賁、張自芳、王端、元靄、孫知微、楊拙、武岳、武洞清、劉常、傅古、曹仁熙、燕穆之、宋迪、劉明復、章友直、艾宣、張涇、宝貴大師、印湘、林生といった画家があり、嗣濮王宗漢、蔣長源、王詵、趙令穰、李公麟、蘇軾らの画家兼收藏家や、沈括のような收藏家が米芾の友人として登場する。

黄筌の画については臨摹し易いので蒐集する価値がないという。黄筌の「鶴鵠図」は蘇州だけでも三十本の摹本があり、また近頃の画院の画家も黄筌の格式を用いているので、一寸古くなつた画が流

出すると、眞迹と全く識別できないといっている。また李成・王維の山水は、唐希維・黄筌の花鳥と同じで、好事家のところに行くかは必ずあるもので、深く論ずる程のものでないという。易元吉は徐熙の後をつぐ第一人者であったが妬まれて猿猿だけが巧みだときれた。趙昌・王友らは才能がなくせいせい婚礼の贈物を作ったり、役所の装飾をする程度である。李成・范寛・関同・董源・巨然・荆浩らについては、それぞれに評価を与えているが、李成の画は技巧が目立つて眞意が足りないといひ、関同については山峰に秀抜の氣風が欠けているとか、人物が平俗であるとかいひ、荆浩には人を驚かすような立派な画はないといひ、范寛は荆浩にとつて出藍の弟子だとする。ただ董源については評価が高く、江南の風景を画いた平淡天真の画風は唐代にはなかつたものだといひ、巨然は董源をよく学んで秀れているという。米芾によれば、董源画に見られる江南の氣風は、実は顧愷之以来のもので、隋から南唐を経て巨然に到るまで、ずっと同じであるとする。これらは董源画を中心に眞意をあらわす画として評価するのである。近人の画は深く論ずるに足るようなものではなく、趙昌・王友・鍾巒らの画といえども、単に墻壁を覆う程のもので、それらが無くても物足りないという感じは受けないという。程坦・崔白・侯封・馬賁・張自芳らの画は、むしろ茶坊・酒店にこそふさわしいものだという。道士牛戩の画は、筆致は粗豪で放縱であるが、品格が俗でなく、その点では艾宣・惠崇・宝貴・張溍より上だという。このような米芾の口吻からすると、画家一人

米芾「画史」について(続)

一人については厳密に眞迹を尋ね当てる鑑賞の基準を確立しておりながら、米芾の眞意は、旧来の大方の画風に満足しない、否むしろそれを拒否するものである。それはいわば、張彦遠の「歴代名画記」の終った唐の会昌元年874から、五代を経て北宋の熙寧七年1074に至る間の画及び画人を論じた郭若虚の「图画見聞誌」の大筋の否定である。そして米芾の眞意は、「画史」の序文においてみずから書画の友と呼ぶ蔣長源をはじめとする、王誥・李公麟・趙令穰・蘇軾らとの交遊のうちにある。彼らは「图画見聞誌」をついで、熙寧七年から南宋の乾道三年1167に至る間の画と画人とを論じた鄧椿の「画繼」の「侯王貴戚」と「軒冕才賢」に列擧されている。收藏家で賞鑑家である劉涇も、米芾の画友として登場し、その林石槎竹の筆墨狂逸が紹介され、その体制は拔脱だとされている。杭士林生は岩穴上士の章に、章友直は搢紳章布の章に、宝寛大師は道人衲子の章に、張溍は花卉翎毛の章に、それぞれ米芾の「画史」の文章に據つて紹介されている。林生の江湖の景や芦雁小禽は氣格が清絶で、唐代にはこのような品格の画はないとされ、徐熙と肩を並べ、艾宣・張溍・宝貴より上だとされる。また蔣長源の山水に生意をみ、宝貴と張溍の翎毛芦雁を不俗とみる。

米芾は友人の李公麟と自分を比較しているが、李公麟は呉道子を手本としたから遂にその習氣を消解することができなかつたが、米芾自身は遅れて画を学び始めたにも拘らず、顧愷之の高雅で古朴な風格を吸収したから、呉道子の画のようなものは画かなかつた。李

公麟の写真は高いものとは言えず、米芾の写真は、他人に理解されようと思われまいと、自己の天分から発しているのだといっている。

また米芾は李公麟と画の構図について議論しながら制作したことを述べ、古今の画家がそれぞれの山水を画くときには、相互にその長所を見習い合つて画くべきだといひ、極くわずかの非凡な画家だけが筆にまかせて画けるのだとして創作と倣作のあり方について論じている。また烟雲の掩映する山水を画くことが手軽に山水を仕立てることであつてはならないともいつている。米芾は好んで三尺の横幅、三尺の縦軸を画き、絶対に大きな画面を画かないことを宣言し、併せて李成や関同のような俗気は自分には全くないといつている。

米芾はまた他人のコレクションについても批評しているが、例えば仁宗の嘉祐年中1056・1063の楊褒・邵必・石揚休の三人のコレクターを比較し論評している。

米芾は「画史」の最後で、友人の沈括がかつて持っていた畢宏の「山水図」両幅の構成を詳しく描写している。沈括が晩年に潤州に隠棲した時、同じく潤州に住んでいた米芾が直接その画の消息を尋ねたが、沈括は以前に別の画と交換して今はもう手もとにないと答えた。米芾はこの画をなつかしく追憶して「画史」の筆を擱いている。沈括の「夢溪筆談」の書画を論じた巻の最後に、董源と巨然の画の特色を論じた有名な箇所があるが、これについては晩年を潤州で過ごした沈括が米芾と語りあったか、あるいは示唆を受けた可能性もあつたらうかと推測する。（「南唐の中主（李璟）の時代、北苑使

の董源は画がうまかつた。とりわけ、秋の気漂う遠景画にたくみで、江南の実在の山々の写生が多く、険しくそばだつものは描かなかつた。その後、建業（現在の南京）の僧巨然は源の画法を祖述し、どちらとも深奥の理をきわめた。

だいたい源と巨然の作品はすべて遠くから鑑賞すべきである。その筆使いはたいへん簡略で、近よつてみると殆ど物の形になつていない。遠くから見ると、風物は鮮やかで、深い内面性はこの世ならぬ世界をみるようである。」（「夢溪筆談」巻十七、書画。梅原郁譯）

#### 〔付記〕

本稿は「米芾『画史』について—絵画のコレクション—」（東西学術研究所創立五十周年記念論文集 四五五四—七二頁）の続編である。

# Mi Fei's *Hua Shi* : Its Translation and Commentary

米芾「画史」について（続）

## Yamaoka Taizo

'Hua Shi' is a publication with which Mi Fei, a painter and calligraphist, expressed himself as a collector and critic of paintings and calligraphic works. As a collector, he detested to be driven by money or desires, and rather enjoyed competing with his friends and actively exchanged collections with them, and claimed that the collections were means of friendship. As a critic, he highly appreciated the paintings of Jian Nan represented by Dong Yuan and Ju Ran as being plain and natural and expressing the truth, and considered the tradition went back to Gu Kai Zhi of Dong Qing and admired him. Mi Fei's friends mainly consisted of painters and calligraphists of late Bei Sung like Li Gong Lin, Wang Shen, and Su Shi. They were against Guo Ruo Xu's 'Tu Hua Jian Wen Shi' focusing on Li Cheng and Fan Kuan, and preceded 'Hua Ji' by Deng Chun of Nan Sung. In 'Hua Shi', Mi Fei also appeared as a scholar and discussed astronomy and phonology, suggesting friendly relations with scholars like Shen Kuo.